五　巡礼地を歩く

2 北陸地方のキリシタン史跡を歩く

福井県のキリシタン史跡巡礼

福井県唯一の殉教史跡太郎右衛門島跡を探す

福井教会の吉川侠治氏は、福井県内のキリシタン研究の第一人者であったが、残念ながら他界したため福井教会ではキリシタンの歴史を知っている人はいなくなった。

「太郎右衛門島」の現地を把握するため、まず、石川県立図書館で「福井県南條郡誌」を調べた。その中に、太郎右衛門がキリシタンで江戸に送られ、火刑に処せられたこと、また、太郎右衛門島の不思議についての記載があり、その島は、糠（ぬか）小学校の後方の糠川にあることが分かった。場所の特定ができたので、現地視察に行くことにし、主任司祭のベルン神父と福井教会元信徒会長の山口幸男氏の三人で出かけた。

太郎右衛門島案内地図

北陸道武生ＩＣから国道八号線を敦賀方面に日本海岸まで進行し、河野総合事務所（旧河野村役場）で場所を尋ねた。河野総合事務所の人たちは親切で、糠小学校は三十数年前に廃校になったこと、太郎右衛門島は河川改修で残っていないがその敷地の三角州はあること、河野村誌の中にキリシタンに関する記載があることを教えていただきコピーを頂戴した。教育委員会の糠出身の前川氏の案内で、太郎右衛門島の跡と言われる三角州を視察することができた。

そのほか、河野図書館の司書から、河野小学校の平田幸憲教諭が子供たちのために『河野村の史跡と施設、自然』という冊子を著し、そのなかに太郎右衛門に関する記述があることを教えてただいた。その冊子には「県道福井大森河野線③を糠より入ると、糠川のダムの終りあたりに木などがかたまっている。糠川の流れをよくする工事をする前までここに島があった。この島は太郎右衛門島とよばれていた。この島には次のような言い伝えがある…」という記述があった。

帰宅して、福井県丹生郡誌・河野村誌を読むと、賀浦十兵衛、八兵衛はキリシタンであるので、福井藩で万事よろしくとのことが、松平昌勝（松

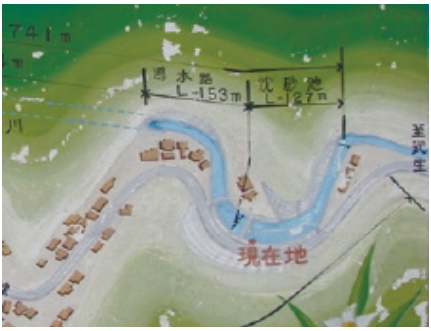
福井県南越前町糠のバス停

岡藩主）が福井藩主の松平昌親に宛てた書状に記載されていた。

福井県南條郡誌記載の太郎右衛門は松岡藩主に年貢減免を直訴したかどで、獄門刑死させられた。そして太郎右衛門はキリシタンではなく年貢減免を頼んだ義民ということになりそうである、と書かれている。そして、義民であったので松岡に太郎右衛門の墓碑を建てた写真が記載されている。この墓碑も移転したと記されている。さらに、河野小学校の平田教諭の冊子では、太郎右衛門はキリシタンで松岡にて処刑されたとある。太郎右衛門島には、その家族が生き埋めにされた。そして、その後毎夜、太郎右衛門島は鳴き動いたと記されている。

太郎右衛門島跡を再訪

金沢教会から報告のあった殉教地「太郎右衛門島」を訪ねた。案内にあったとおり北陸自動車道武生ＩＣから国道八号線に出た（名古屋方面から行くには敦賀ＩＣを出た方が近い）。そして日本海沿い三〇五号線（漁火街道）を北上して河野の町の北外れにある糠に至る。糠のバス停とエッソスタン



昭和 48 年
「小規模河川改修」工事案内看板

糠川中流域沈砂池の三角洲

ドの三叉路を右折、県道三号線〔福井大森河野線〕を東の山道に入り民家の町並みを過ぎた所の糠川のダムに出合う。

福井県南越前町糠（旧・南条郡河野村糠）、この二級河川糠川は急峻な谷間を蛇行する洪水流下能力の小さい河川で、流域住民は過去に幾度となく出水による被害に悩まされてきた。また国道三〇五号線に出る道幅が狭く屈曲し大型車の通行に不便をきたしていたので、一九七三年（昭和四十八）、県による「小規模河川改修、道路改良合併事業」として河川改修を行った。道路拡幅改良工事に伴いここにあった太郎右衛門島の三角洲は消滅。現況の様子は沈砂池ダムの端に三角洲の痕跡がみられた。護岸工事が施された三角洲は宅地となっており、民家が建ち並んでいて昔日の姿はなかった。

魚津観音堂附近の地図

「魚津埋没林博物館」

越中魚津のキリシタン塚を歩く

魚津市釈迦堂八一四番

「魚津埋没林博物館」敷地付近

地元の知人の紹介で、魚津在住のキリシタン塚の歴史に詳しい中村松太郎氏から話を聞いたところ、田畑川は現在の河川名ではなく、日本カーバイド工場の南側外周を流れる河川ではないかといわれ、それに従って現地の様子を調査した。

魚津市の歴史民族博物館に隣接する「吉田記念郷土館」で尋ねたところ、魚津の古絵図を調査された魚津在住の紙谷信雄氏の『魚津古今記・永鑑等史料』のなかに古絵図「鰤網等目当山御絵図浦役所」があり、図中に「田畑川」の名が記されているのを教えてもらった。

魚津に田畑川はあったのである。現在の場所は明治以降の近代化により工場建設敷地となり、魚津港拡張や河川改修工事により、また最近は「魚津埋没林博物館」の建設により塚跡は海中に殁しているとも言われ江戸期の姿は見ることができない。

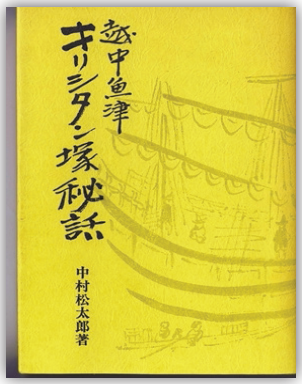
しかし博物館の屋上からかつての海岸線を望んでみると、江戸時代鰤漁の舟から湊の方角を知るために松の木と塚を目印としたとされ、往古は「八

博物館中庭にある塚跡か

博物館より魚津港海岸を望む

殿の塚」が並んでいた田畑川があったその場所である。旧田畑川の手前の博物館敷地の海寄りの、工事以前の地盤と思われる位置に松林があり、その中の二本の松の根本に石を円環状に並べた塚跡らしきものを見つけた。あるいは鈴木孫左衛門一族の塚跡ではないかと想像し不思議な歴史の因縁を感じた。

キリシタン殉教者鈴木孫左衛門のさらに詳しい情報については、中村松太郎著『越中魚津キリシタン塚秘話』を参考にされたい。



中村松太郎
『越中魚津キリシタン秘話』

富山県のキリシタン史跡巡礼

明治時代の殉教地「きくの塚」を訪ねて

富山市婦中町長沢の「きくの墓」を訪ねたのは二〇一一年九月一日であった。前日の夜に現地の近くのホテルに宿泊したのであるが、宿泊客の話題は隣町八尾の風の盆踊りの事ばかりであった。

金沢教会の吉岡氏の案内で富山市婦中町長沢三九三三番地にある浄土真宗大谷派長沢山西光寺を訪ねた。西光寺住職源大寿氏は所要で不在であったが、前住職のお庫裏さんに「キリシタンきく塚」のお話をお聞きすることが出来た。「重次郎妻きくは六月二十日難産で死去し長沢の焼場に葬られ二基の石柱が立てられていたが、その後富山市営の「長岡墓地」に合併されその場所は不明となっている」そうである。

重次郎坂地蔵堂への入口看板

旧国道359号線沿いの古里郵便局とＮＴＴ通信局

「重次郎坂」の山道案内地図

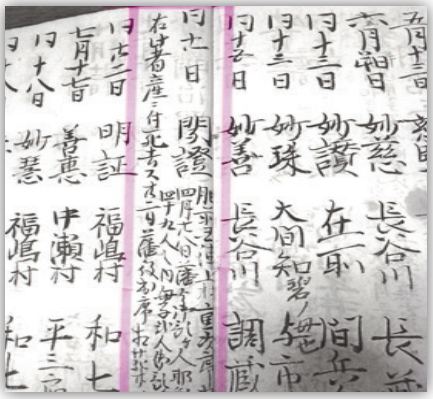
きくの死について以前に西光寺の過去帳に記録されているという写真を木越邦子著『キリシタンの記憶』（七十二頁）で見たが、一部不鮮明な部分があったのでお願いをして再度拝見させて頂いた。天保年間から記録されている過去帳の綴じ込み部分で隠れていた行にはきくの法名と出身地が書き記されていた。

明治三年六月二十日、重次郎の妻きくは、西光寺の住職慈慶や寺方の女たちの手厚い介抱もかいなく、難産で出産後すぐに母子共々死去し、二十二日に藩役人立会いの下で長沢村の焼場の一隅に葬られた。法名は過去帳によると（釈尼）「聞證」である。

「同廿日　聞證　肥前国浦上村重次郎妻きく　四月廿八日藩より御預ケ人耶蘇宗徒四十九人之内母子弐人御預ケ相成　右此者産ニ付死去ス　廿二日藩役出席相葬ル」（明治三年六月部分）。

祠堂のなかの
地蔵尊像とマリア像

キリシタンきく塚
長沢西光寺流配キリシタン



西光寺『過去帳』
1870 年（明治 3）6 月 20 日部分

西光寺の近くにある「きくの塚」を訪ねた。車では富山市から国道四一号線掛尾町信号から国道三五九号線に入り、長沢西（信号）交差点を左折し、最初の角を右折し、古里郵便局、ＮＴＴ通信所を右折すると、「きく塚」の案内板があり、徒歩で山中を約一〇〇メートル西に入ったところで山中にひっそりとお堂が建っていた。